

Ordo Templi Orientis 東方聖堂騎士團

Version 1.5

Hieros Phoenix





OTO 東方聖堂騎士団

by Hieros Phoenix

汝の意志することを行え、それが法の全てとなろう

1. 『法の書』による精神潮流の変革

”「OTO」という三文字は、「東洋のテンプル騎士団」とも「東の聖堂の修道会」とも翻訳できる「Ordo Templi Orientis」の略である。OTOとは、普遍的な兄弟愛の基に美と勇気と機知を以て、個人の自由を、また個人の光と智慧、理解、知識、力に於いての発展を確保するという、貴い目標に専念している公開のセレマ同胞団（Outer Thelemic Order）である。”

OTOとは前世紀初頭にヨーロッパ大陸で派生した秘教的友愛団体である。その設立年すら諸説が入り乱れており、定かではないものの少なくとも1905年にはその礎は確たるものとして確立している。初期のOTO、即ち「世紀末の獣」を自称する魔術師、預言者、詩人、登山家、小説家一多ある多彩な才能を発揮した人物、アレクスター・クロウリーが団を統治する以前は、純然たるフリーメーソンリー系列を標榜していた。この世紀末の獣は、幾つかの偶然、あるいは必然により後にOTOの世界的指導者として君臨することになる。OTOは、現在世界的にもっとも活動的な魔術結社の一つとして知られている。その知名度を飛躍的に高めた張本人こそアレクスター・クロウリーであり、

同団はクロウリーが注入したエッセンス、Thelema(ギリシャ語で「意志」を意味する)の哲学と魔術によって、大きく変貌を遂げることとなった。アレイスター・クロウリーが受け取った謎に満ちた一冊の書物『法の書』(Liber CCXX, Liber AL vel Legis)こそがそのエッセンスの源であり、OTOはThelemaの法を正式に受け入れた世界で初めての魔術結社として進化してきた。この書物は未だ解明つくされていない稀代の預言書であり、その発生の由来すらも客観的確認に乏しい。我々はアレイスター・クロウリーが伝え聞いたとされる言葉を「己の魂と直感」という指標以外に何ら判断する術を持たない。

1904年4月8日正午前、エジプトのカイロ。

クロウリーによれば、『法の書』を伝えたアイワスの声は、彼の左肩の向こう、部屋の最も遠い角から聞こえてきたという。その声は深い声質で、音楽的で表現豊か。その口調は厳粛にして官能的・・・柔らかく、時に獐犷な声量あるテナーもしくはバリトン。アイワスは物理的な肉体を持たず、インセンスの煙のような繊細な物質から成り、背の高い、30代のがっしりとした男性に見えた。意欲的で力強く、荒々しい王の顔つき。服装はアラブ風ではなく、アッシリアもしくはペルシャのそれであったという。まるでその当時のクロウリーの精悍さそのものである。古代エジプトの沈黙の神ホール・パー・クラートの大吏と名乗る謎の指導霊アイワス。その教えの中核は、人間の(真の)意志の力が人を自由へと導くこと、新しい時代(ホルスのアイオン)の魔術の術式についての深遠な教義に他ならない。65枚の紙に筆記された220節のメッセージ。65は主アドナイ(Adonai)、聖守護天使の数字、そして光(L.V.X.)の数字である。また全体が220節からなることから『220の書』(Liber CCXX)とも呼ばれる稀有な魔道書、それが『法の書』である。クロウリー、そしてOTOが提唱するThelemaのエッセンスは下記の『法の書』の三つの言葉に収斂されている。

“汝の意志することを行え、それが法の全てとなろう”

“愛は法なり、意志の下に愛こそが”

“全ての男と全ての女は星である”

人間の全ての「意志」=Thelemaは、人間が原初から保有する「真の意志」(True Will)より派生している。この抑圧された「真の意志」を自覚、あるいは想起し、自らの欲望と願望を超越した根源としての唯一の意志を見つけ出す行為こそが、Thelemeの実践者たる Thelemite の務めとなる。この意志は明らかに愛による結合を希求している。また

『法の書』のエッセンスは「愛」である。人間の内奥に秘められた「真の意志」とは、即ち愛による完全なる充足、自己実現であり、超個的で根源たる「無」へと回帰することである。またその行為は、人間が数千年に渡り抑圧し続けてきた自己の神性を肯定し、秘められた神を開放する能動的行為である。全ての人間は無意識的に自己の神性を否定し、靈性を矮小化し、外在する偶像と自らの想像より派生した神の像=イメージを投影し続けてきた。Thelemaの体系は、それらの古き時代の因習から自らを脱却させるために、また古き時代の支配的圧政と呪縛から自己を解放するために、新しい時代の到来を肯定し、その時代を「ホルスのアイオン」と呼んだのだ。その教義の全ては『法の書』に書き記されている。そしてその教義はまたOTOの中心的テーマにもなっている。「全ての男と全ての女は星である」という言葉は、全ての人間が本質的に神であることを表明し、その中核的な神性は決して抑圧されるべきではないことを示唆する。OTOでは、この信念を下記の言葉で断言する

“Deus est Home, Homo est Deus”

その意味は”神は人なり、人は神なり”であり、この言葉は世界と宇宙の観察者としての人間存在抜きには、神の存在そのものが意味を成さないという事実も伝えている。OTOは個と集団の為の「社会的・科学的啓明主義」の結社である。東洋の秘教は、どの時代においても、この事実を認識し、また実践することを推奨してきた。Thelemaは普遍的な教義であるため、東洋の学徒にも何らの違和感もなく受け入れることができる。しかし、数千年に渡る「父のアイオン」――従属的で不平等、且つ誤謬に充ちた科学観の支配下にあった西洋文明ではThelemaはなお一層退廃的な空気を発散している。我々、東洋の学徒は多分に西洋化された時代の流れにあっても、その宗教観においては、西洋とは比べようもない程に自由で寛容な発想を持つことができる。そして、その文化と宗教観はThelemaの原理を正しく咀嚼するためのバックグラウンドとなっている。しかし、それ故に西洋の秘教学、そして西洋の結社の様態を理解し、OTOで有効に学ぶための幾つかの違和感を、まず払拭しなければならない。その為には、そもそもOTOの秘儀=イニシエーションの全体像を理解することが肝要になる。

2. OTOの秘儀とは？

“OTOの仕組は、フリーメーソン団や古の西洋神秘学派のそれと同様に、一連の秘儀参入もしくは位階に基づいており、その大半は儀式によって授けられる。これら位階の儀式に於いては、OTOが個人の志願者に寓意や象徴を用いて、「自然」の奥深い秘儀

について指導する。これにより、志願者が真の「自己」を追及するのを手助けしようとしているのである。”

西洋の秘儀参入のスタイルの特徴は、体験を通じた直接的な知識の開陳である。しかし、この直接的な知識は、自我を対象にしたものではない。その為に有効に使用されるのが寓意と象徴である。OTO に於ける秘教の探求の核は、この一連の秘儀参入儀式にある。上記のごとく寓意や象徴によってもたらされる秘教的な知識、またその実体験がもたらす「理解」と「衝撃」こそが、志願者の探究心を大いに鼓舞する役目を果たしている。OTO における連続した秘儀参入による自己変容のプロセスは単に受動的なものではなく、それらの儀式が内包する啓示の種子が志願者のプッシュケーの中で発芽し、成長するといった能動的な要素を必ず孕んでいなければならない。即ち、秘儀参入の奥義は、決して書物に書き表せるものではないのだ。その為に活用される手法が寓意と象徴であり、OTO においてもそれらが巧みに埋め込まれている。またその意味は、各人各様に咀嚼できる素地を残している。一つの儀式が内包している知識は、即座に理解されるものもあれば、数年から数十年かかかって理解されるものもある。秘儀参入による直接的な知識は、逆説的に成長し拡大するものであり、「直接的」手法は、即ち「即時的」に機能するものばかりではないという事実を理解することは重要である。事実、もしあなたがOTO の最初のイニシエーション受けたとしよう。しかし、即時的な理解は思いの程少ないことにあなたは驚くことだろう。まだ、あなたは謎に包まれたままであり、さしあたってあなたに助力の手を差し伸べるものは、秘儀伝授者による然程多くはない解説のみである。しかし、それこそが正にアレイスター・クロウリーが仕組んだ秘儀なのである。繰り返すが、秘儀参入の際に学んだ直接的・体験的知識は、あなたという体験者の魂の中で成長していくものである。もし、それが途中で行き詰まり、また後退したとしたならば、それは体験者の意志そのものが停滞し、後退したということになるだろう。秘儀授与者、そしてOTO は、あなたの魂に最初の種を蒔く。そして参入授与者は、ほんの少ししかあなたに水を与えることはない。そこからの成長は、あなた自身に託された義務であり、沢山の水を与えることは、逆にあなたを枯渇させてしまうだろう。そしてその成長の過程は「大いなる技」(Great Work)と呼ばれるあなた自身の「大いなる回帰への径」に託されている。

3. OTO の沿革

「黄金の夜明け」団の興隆とほぼ時を同じくしてドイツ語圏で勃興した様々な試みが、後にアレイスター・クロウリーの手によって変革・刷新された経緯について積極的に学

ぶことは全ての OT0 の参入者に奨励される課題である。幸いにして、クロウリーの手による書物は殆どが復刻され、またインター・ネットで簡単に入手できるものも数多く存在している。

1919 年に刊行された『春秋分点 第三巻 1 号』は OT0 の団としての宣言書「52 の書」(Liber LII)が含まれている。まずは、OT0 の秘教的バックグラウンドを知るために、OT0 の成立の過程に関与した団体を確認してみよう。OT0 は下記に列挙する諸団体から、その秘儀の体系を編纂したことが読み取れる。

- a. グノーシス・カトリック教会
- b. 聖霊の騎士団
- c. 啓明団(イルミナティ)
- d. 聖堂騎士団
- e. 聖ヨハネ騎士団
- f. マルタ騎士団
- g. 聖墳墓騎士団
- h. 聖杯の隠れたる教会
- i. 光のヘルメスの同胞団
- j. 聖なるヘレドムの薔薇十字団
- k. 聖なるエノクのロイヤル・アーチ団
- l. メーソンリーの古代原始儀礼(33 位階).
- m. メンフィス儀礼(97 位階).
- n. ミツライム儀礼(90 位階).
- o. メーソンリーの古式公認スコティッシュ儀礼(33 位階).
- p. メーソンリーのスウェーデンボルグ儀礼.
- q. マーティニスト団
- r. サト・バイ団

OT0 の位階の秘儀参入儀礼は上記の内、「メイソンリーの古式公認スコティッシュ儀礼 AASR(Ancient and Accepted Scottish Rite of Masonry)」の 33 位階とメンフィス儀礼 97 位階、ミツライム儀礼 90 位階の影響が強く、いずれにしてもこれらの高位階儀礼は英国のフリーメーソン、ジャン・ヤーカー(1833-1913) からもたらされたものである。ヤーカーは、正規のメーソンとしても名高い人物であり、生前からクロウリーとも交流があった。彼は英国のメーソンリーとその傍流を収集する秘教学マニアの一人である。



OTO の創始者であるカール・ケルナー (1851-1905) はオーストリアの裕福な製紙化学者であり、東洋の神秘主義と西洋のフリーメイソンリー、薔薇十字主義の熱心な信奉者であった。ヨーロッパ、アメリカ大陸、アジアを幅広く旅行して回ったケルナーは、その旅先でスーフィーとヒンドゥーのタントリズムの達人ら三名に遭遇したと主張している。ケルナーは東洋の秘教を積極的に調査し、また技法に関する幾つかの論文を残している。しかしケルナーが OTO を設立した背景には、性魔術の理論化に関する先駆者であった米国のパスカル・ビバリー・ランドルフ (1825-1874) と彼が深く関係していた魔術団体「光のヘルメスの兄弟団」 (The Hermetic Brotherhood of Light) の存在が指摘されるべきである。つまり、性魔術の理論と実践は、ケルナーが西洋において初めて体系化したわけではなく、彼は先人達から入手した性魔術技法を流用し、OTO の高位階 (第七～八位階) へと配置したのである。そして、その下に前出の一連の非認可メイソンリー儀式群を絶妙に配備することによって、それまでには存在し得なかった独自の秘教団体設立の発想を得たのである。

ケルナーは 1885 年に神智学と薔薇十字主義の権威フランツ・ハルトマン (1838-1912) と出会う。ハルトマンはオカルトに関する著作が幾つかあり、明らかに初期の OTO に関係していた人物の一人である。更に同年、ケルナーは新たな団体のコンセプトである「Academia Masonica」についてセオドア・ロイス (1855-1923 後の OTO の二代目 OHO = Outer Head of Order、外なる団の首領) という優秀な協力者を得ることとなった。ヨーロッパ起源の非認可メイソンリー団体の数多の儀礼が英国のジャン・ヤーカーや「黄金の夜明け」団の設立者の一人であるウィリアム・ウィン・ウェストコット達、更には OTO の初期の発展に大きく寄与したセオドア・ロイスらの間で交換された事実は興味深い。当時のヨーロッパではこのような儀礼の交換や相互公認は比較的活発におこなわれており、ウェストコットはセオドア・ロイスに「英国薔薇十字協会」や疑似メイソンリー儀礼である「スウェーデンボルグ儀礼」のドイツ支部設立の許可を与えるなど、極めて親密な関係にあったといえる。ヘルメスの結社「黄金の夜明け」団の前身はマスター・メーソン (第 3 位階) のみを会員と認める「英国薔薇十字協会 (SRIA)」であり、「黄金の夜明け」団は同会のメンバーが中心となって発足されたことから、本来のメイソン一本の活動よりも、更に「オカルト」的なアプローチを嗜好する幾人かのフリーメイソン達によって設立された団体であるという側面を持っている。ドイツ語圏に於ける秘教的フリーメイソンリーは、ケルナー、ハルトマン、ロイスらの「Academia Masonica」というコンセプトの下、「メンフィス・アンド・ミツライム」や「古式公認スコティッシュ儀礼」などを基盤とした秘教的集団として台頭する。そして彼らが収集した秘教的儀

礼と知識が先に列挙された数々の団体から受け継いだものである。その背景には常に英国の非主流派のオカルト・メーソン達との提携が存在していた。「Academia Masonica」は後の「東方聖堂騎士団(OTO)」へと発展し、1910年を境に、当時「黄金の夜明け」団の「小達人参入儀式」出版差し止め裁判でマクレガー・マサースと敵対していたアレクスター・クロウリー(1875-1943)に団の名誉位階(第七位階)を授与するという形を取りながら英国に進出してくるのである。OTOはいずれにしても散在する非認可メーソンリー儀礼のコレクターがメーソン大学なるコンセプトをもとに設立し、その上部位階に性魔術の技法を温存するヨーロッパの一団体であった。「メンフィスとミツライム」の高位階群、「光のヘルメスの同胞団」の薔薇十字秘教学、更に全てのメーソンの象徴体系が並列されているオカルト・インナー・グループと呼ぶに相応しい画期的な集団の成立である。OTOの初期の文書、例えば1906年にセオドア・ロイスによって書かれた「I. N. R. I.」といういかにも薔薇十字主義的な文書によると、OTOは「ヘルメスの科学のカレッジ」と定義されている。OTOは現代のマジの学校であり、「プロベিশヨナー」、「学徒」、「秘儀参入者」のクラス毎に特定の学習コースを用意していた。

とはいえ、ケルナーとロイスの「Academia Masonica」という画期的なコンセプトは、当初うまく起動しなかった。ロイスはレオポルド・エンゲル(1858-1931)と共にBarbarian Order of Illuminatiの復活を画策しており多忙を極めていた。またメーソンリーの秘儀を取り扱う以上、厳格なフリーメーソンの気質が女性の参加を認めてこなかったという事実を想起しなければならない。複数のメーソン系儀礼を綜合する作業とともに、そこに女性の参加を認める基盤作りを整備することには、少なからぬ障害が横たわっていたことが容易に想像できる。この女性を参入者として迎え入れるという姿勢は、現代のOTOではあたりまえのことであるが前世期初頭のメーソンリー系列では、重大なタブーであったのである(そして現在においてもフリーメーソンリーは女性の参入を認めていない)。

ケルナーとロイスは団の名称が明示されていない初期の活動の中で、ハタ・ヨガのサークルを組織し、周囲のメーソンからその体系の実践者を迎え入れた。1904年になり、ケルナーの体調が悪化するとともにロイスは「メンフィスとミツライム」や「古式公認スコティッシュ儀礼」のイニシエート達をOTOへと招待するようになる。その際に彼に協力したドイツのオカルティストが前出のフランツ・ハルトマンとヘインリッヒ・クレインの両名である。そしてロイスは1906年に団の最初の「憲法」を公布することになるのである。

セオドア・ロイスはプロの歌手にしてジャーナリスト、そしてプロシア警察のスパイ活動をしていたことでも知られている。彼は1876年11月21歳の時にロンドンにて初め



てフリーメーソンリーに参入している。彼をイニシエートした Pilgrim Lodge No. 238 は勿論、英国メーソンリーのグランド・ロッジに認可された正規のロッジであった。1878 年にはマスター・メーソンとなり、以後 1880 年のドロップ・アウトまで正規のメーソンとして活動している。1880 年は彼がイルミナティの復活を宣言した年であり、彼の主張によれば、この年ミュンヘンにイルミナティのロッジである Ludwig Lodge が設立されたという。それ以降は前出の英国のオカルルト・コネクションを駆使し、メーソン系儀礼の収集に跋扈している。1905 年にカール・ケル

ナーがこの世を去るとロイスは OT0 運営の全権を掌握する。OT0 がその名を明かすのはケルナーの死後であり、1906 年に発行された団の雑誌『オリフラメ』で、ロイスは以下の如く自分自身を定義している。曰く、「Sovereign Grand Master General ad vitam of the United Orders of the Scottish, Memphis and Misraim Freemasons in and for the German Reich, Sovereign Grand Commander, Absolute Grand Sovereign, Sovereign Pontiff, Sovereign Grand Master of the OT0 Freemasons, Supreme Magus Soc. Frat. R. C., SI 33°, Termaximus Regens I. O. etc.」 恐ろしく大仰なタイトルに辟易するものの、これが当時彼が獲得していた位階の複雑怪奇さを物語っている。OT0 設立の礎を築いたのは、初代 O. H. O. カール・ケルナーであることは間違いない。しかし、初期の OT0 の位階構造を発展させたのはセオドア・ロイスだと言える。

ここでセオドア・ロイスが復活させたイルミナティについて、若干の解説を行うのが適切であろう。何故ならば、この悪名高き結社の教義の中に、我々の「聖なる団」に繋がる最初の種子が見て取れるからである。オリジナルの「イルミナティ」団の設立者は、我々の「グノーシス・カトリック教会」の聖人の一人でもあるアダム・ヴァイスハウプト(1748-1830 年)である。彼はバイエルンのインゴシュタット大学の教会法の教授であり、フリーメーソンでもあった。アレクスター・クロウリー、バフォメット X° は、彼のことを A.:A.: の「神殿の首領」8=3 マジスター・テンプリであると見做していた。それはまた深淵を越えた A.:A.: の「第三団」である Silver Star 団の成員であることを意味する。「グノーシス・カトリック教会」の聖人達は、また A.:A.: の第三団「銀の星」の成員でもあり、ここに A.:A.: と OT0 の明確な関係が見て取れる。ここに、Duplexity〈二重性〉と呼ばれる両団の相互関連性の魔術的、且つ象徴学的考察が示唆される。

ヴァイスハウプトの「イルミナティ」団のイニシエーション・システムに於ける諸位階は、我々 OT0 と同様に大きく三分割されている。それらは「養成位階」、「メーソンリー位階」、大密儀と小密儀を含む「密儀位階」として三分割されていた。それらの三分割の中には、それぞれまた個別の位階が存在していた。「養成位階」には、〈修練者〉、

〈ミネルヴァル〉、〈小啓明者〉の各位階がある。「メーソン位階」には、〈大啓明者〉と〈教導啓明者〉があり、「密儀位階」には、〈司祭〉または〈秘儀参入者〉と小密儀を含む〈統治者〉の位階があり、これに魔術師〈メイガス〉の位階が続く。最上級の〈王〉の位階は大密儀を含んでいる。「イルミナティ」団の位階には、他にも様々なバリエーションが存在しており、位階の呼び名も一様ではない。我々が手に取れる団の歴史書によれば、そのバリエーションの理由が、ヴァイスハウプトの同盟者であったバロン・アドルフ・フランツ・フリードリッヒ・クニッゲ男爵（1752-1796 年）にあったことが解る。「イルミナティ」団の位階システムと諸儀礼は、主にこのクニッゲ男爵により創作され、また彼の力によってヨーロッパ全土に拡大された。

我々OTOの最初の入門儀礼「ミネルヴァル」の位階は、「イルミナティ」の位階システムの二番目の位階であり、我々はその位階の名称を他の古典的なメーソンリーの諸システムに見出すことはない。後に概略を述べるOTOの位階システムの内、少なくとも二つの位階の名称が「イルミナティ」団に由来していることは重要な事である。第零位階であるミネルヴァルと、第8位階である〈イルミナティの完全なる大司教〉、〈イルミナティの秘儀参入者〉がそれである。我々が書店へと赴けば、簡単に貧相なイルミナティの陰謀論、「ニュー・ワールド・オーダー」に関する本を手にとることができる。「イルミナティ」は、未だに人々の妄想と恐怖を投影する魔法の鏡である。

ヴァイスハウプトは、社会的平等と自由を強調する急進的思想の持ち主だった。彼は、全ての人々は「王」であると主張していた。彼の敵はローマ・カトリックの封建制度と王位・王権・王政であり、しかしながら彼は決して暴力の唱道者ではなかった。彼は人々の倫理と道徳の変化と進化による平和的革命を目指していたのである。彼の主張は保守的な人々にとっては危険な政治思想でしかなく、確かに彼は迫害を受けていた。我々は、しかしここにラー・ホール・クイトの方法、人類の為の理想的革命の種子を見出す。マジスター・テンプリであるアダム・ヴァイスハウプトは、全ての人間は「王」であると宣言した。「全ての男と女は王なり」、しかし、それは我々にとっては、もう余り意味を持たない概念である。

我々のグランド・マスター、バフォメット X^o は『オズの書』を書き表した。これはOTOの計画の要約であり、道徳的、肉体的、心的観点、そして性の自由と虐殺者からの防衛という観点に於ける人間の権利に関するOTOの新しい声明書である。「人間以外に神はなし」とは我々の宣言であり、「我の中に在りて神ならざるものなし」とは我々の「真なる性質」である。1906年に公布されたセオドア・ロイスの憲法、「東方の聖堂騎士団の古代結社の憲法」には勿論セレマのコンセプトは存在していなかった。団は「ヘルメス科学」団から、「社会的科学的啓明主義」団へと変化し、アレイスター・クロウ

リーという一人の傑出した参加者によって、セレマの普遍的同胞団へと進化したのである。

J. F. C. フラー(1878 -1966) は、クロウリーの高名な弟子であり、A・A・の最初のキャンセラリウスだった人物である。彼は、自身の「カバラの秘密の叡智」の中で啓明主義をこう定義している。

「啓明主義とは、光の普遍的科学として定義できるだろう。それは単に霊的な意味合いだけではなく、完全なるミステリーである物理的な性質を含む光でもある。「神」とは「光」なり。光無なき世界が創造され、生命はそこから形式的に変化し、光として活動する。死とは、その暗闇の影である」

社会的科学的啓明主義は、無知と古き信仰、誤解に依拠する信念、そして偏見に満ちた暗き地球の硬直した諸概念を照らし出す。社会的科学的啓明主義は、無意識や古きアイオンのあらゆる死せるドグマの領域を照明する力を持っているのである。



クロウリーがOTOの第七位階として承認されたのは前出の通り1910年のことであり、1912年4月21日付けのチャーターにより英国及びアイルランドを直轄する団のナショナル・グランド・マスター・ジェネラル(第10位階)に就任する。この時設立されたOTOの英国支部M.:M.:M.: (Mysteria Mystica Maxima)こそが、我々現代OTOのルーツとなる英国起源の組織である。クロウリーとロイスの出会いには1913年に自費出版されたクロウリーの『虚言の書』が引き金となっている。ロイスは、クロウリーが出版したその薄い本の一部が、OTOの最奥の秘密を暴露するものだとして主張し、クロウリーを糾弾した。ロイスが指摘した部分は、クロウリーが設立した「銀の星」団の団員達のために作成した六芒星儀式「スター・サファイヤ」(Liber XXXVI)であった。この一件については、多くの書籍で取り上げられている有名な逸話でもあるので、ここでは割愛する。『虚言の書』の一件以降、クロウリーのOTO熱は上昇していき、彼が当時自己出版していたオカルト百科全書にして、「銀の星」団の正式な機関誌である『春秋分点』誌の第一巻の後半の号ではOTOが大きく紹介されることになる。彼はそれまでメーソンリー色の強かったOTOの儀礼に彼のセラマ哲学のエッセンスを注ぎ込んで改変し、その作業を1912年から1940年代に至るまで継続した。ここにおいて、元来メーソンリー色が濃厚な一連のOTOの秘儀参入儀式に大胆なThelemaの色が注入されていくことになる。クロウリーは、「銀の星」団から生まれたThelemaをOTOに大胆に注入することによって、OTOをThelemaの

法を受け入れた世界で最初の団体として改変したのである。彼はまず OT0 の位階を『法の書』の中の教えに基づいて、三つのグループに分割した。即ち、「隠者」、「恋人」「大地の男」と呼ばれる三つ組みである。

『第 52 の書』（『春秋分点』第三巻 1 号所収）と呼ばれる OT0 の声明書は、我々に極めて初歩的な情報しか与えてくれない。『アバの書』付録 I 所収の OT0 の公的指導によれば、その声明書は、団の作業の総計に関する基礎的概要を含んでいると説明されている。しかし、アレイスター・クロウリーのこの最初の OT0 の声明書だけでは団の作業は極めて不明瞭なままであると言わざるを得ない。声明書はこう宣言している。

「OT0 の目的は、団の最高位の参入者のみによって十全に理解される。しかし、その内実については、こう述べられるであろう。ヘルメスの科学、或いは隠秘学知識、純粹なる光の神聖魔術、神秘的達成の秘密、全ての形態のヨガ、ナーナ・ヨガ、ラジャ・ヨガ、バクタ・ヨガとハタ・ヨガ、そして古代の隠された叡智の全ての学派に関して OT0 は教示する、と。」

4. OT0 の魔術

米国の著名な OT0 参入者、ジェームズ・ワッシャーマンは、『聖堂騎士団と暗殺団』の序文に於いて、「神秘的秘密結社」をこう定義している。

「神秘的な秘密結社は、あらゆる時代と文化に存在したイニシエーションと靈的な自由へと献身する。アボリジニ部族民の神話的召喚であるデーヴィッシュの恍惚的旋回も、それらの結社も目的は同じである。グループ・セッティング内に於ける、個々の意識のプログラミングされた変容である」

さて、OT0 の魔術とそのカリキュラムを語る際に、最も重要な点は「団」に於けるあなたの魔術カリキュラムは、あなたの「意志」に基づき、あなた自身で決定しなければならないということである。我々の真なる団の長である兄弟ハイメナエウス・ベータは、『アバの書』所収の付録の中で OT0 のカリキュラムについてこう書いている。

「東方聖堂騎士団は、古きアイオンの時代に「セレマの法」を受け入れた最初の結社である。それはアレイスター・クロウリー（バフォメット XI^o）によって、再構築され、とりわけセレマの法の公布に於ける宗教的、人道主義的使命を活性化し、聖別した」

「OTO は、A∴A∴と同様な感覚で教え、また参入させるのではない。明確なカリキュラムは未定義で、また殆どの位階において試験されることもない。OTO の真のカリキュラムは、各個人の人生と不可分であり、それぞれの参入者のカリキュラムはそれぞれにユニークである」

OTO は現在の〈子供のアイオン〉に於ける「Thelema セレマの法」を普及する為の基礎的団体である。では翻って、そもそもセレマとはセレマイトとは何なのであろうか？

セレマとは、文字通り解釈するならば、〈子供たるホルスのアイオン〉に於けるセレマイト達にとっての魔術的、哲学的、宗教的システムである。それは意志に基づき変化を引き起こす科学にして芸術である魔術の実践的メソッドであり、「セレマの法」と共にある人類の解放の哲学であり、同時に「神は人なり、人は神なり」をモットーとした宗教的システムでもある。そして我々の宗教的活動体として「グノーシス・カトリック教会」がある。OTO は、古きアイオンの中で、最初に「セレマの法」を受け入れた結社であり、それ故に OTO こそはセレマのイニシエート達の結社であると定義できる。

アレクスター・クロウリーは、『青の春秋分点』の編集者論説で重要な考えを述べている。A∴A∴は、霊的進化の径を提供し、個としての探究者を啓明し、指導する。OTO は、連続するイニシエーションを通じて集団を訓練する。A∴A∴と OTO の違いは強調されなければならない。それらは、互いに完全に独立しているものの、互いのカリキュラムは時に関連し合い交差する。OTO の径は、イニシエーションによる集団の教育と、新しい「教会」の建立に献身する径であり、一方 A∴A∴は、魔術とヨガが十全、且つ体系的に教えられる魔術と神秘主義の学舎である。この両団はコインの表と裏であり、その二重性こそが Duplexity である。

前述したように、OTO の真の魔術カリキュラムは、個々の人生に依存し、また個々の人生の諸問題に対処でき得るような普遍的な魔術の術式によって成立している。この術式は、「人生」の体験である第二位階の参入儀式の場で明確に示唆され、またイニシエーターによって、その「知」が伝授される。OTO の第二位階の団員は「魔術師 (Magician)」と呼ばれ、その普遍的術式を正に個々の人生に適用することを奨励される。これは魔術そのものを個々の人生哲学の基盤として駆使することを意味し、またこの普遍的術式は、啓明を得る為の魔術的発達論としても明示されている。

多くの魔術志願者を結果的に魔術修業から遠ざけてしまう要素は多岐に渡る。その筆頭に挙げられるものは、固定されたカリキュラムを段階的に踏むことを推奨される学習システムそのものにある。ここには日々の魔術の結果を記録に残すという単純明快な、し

かしながら油断できない重荷が課されることになる。アレイスター・クロウリーは膨大な著述を行う傍ら、記録魔と呼んでも遜色ない程に、日々の魔術の結果と思索を日記に綴り続けた人物である。それは彼の中では科学的なアプローチであると理解されていた。A∴A∴内部では記録されていない魔術実践の結果は、その存在すら認められることはなかった。クロウリーは、新しく魔術修業の径に踏み込んだ学徒に対して、_Magick Without Tears_の中でこう述べている。

「あなたはまず、両親と家系について、誕生時の状況や教育、あなたの社会的ポジション、経済状況、体型、健康面、病歴、性的な履歴、趣味や娯楽について書かなければならない” ”なぜ大いなる術に関心を抱くに至ったか？ 過去、あなたが隷属していたもの(神智学、人智学、まがい物の薔薇十字団などの偽りの探求などがあれば)との関連、そしていかにして私を見いだし、なぜわたしの助力を得ようと決心したのかを」

つまりクロウリーは、初期の魔法日記を通じて弟子に対して過去の自分を全て曝け出すように要求したのである。一方、OTOの内部では、魔術の記録であれ、私生活の記録であれ、それを第三者に開示する必要は全くなく、またそもそも魔術日記を記す義務もない。これはOTOが魔術の教育団体ではないことを示唆している。しかし、OTOの第二位階の参加者は、正しく「魔術師」と呼ばれている。「魔術師」である以上、参加者は生活の中に魔術を適用し、また日々その法則に従い、人生の基盤とすることを強く推奨される。

では、魔術日記を記すことのない一介の魔術マニアとOTOの「魔術師」の差異はどこにあるのだろうか？ それは前述した魔術の普遍的な法則を実践するか否かによって厳密に区別されるということになる。そこには明確なMagickの法則があり、その法則、または術式が彼をして「魔術師」たらしめているのである。彼は自信を持って、自らが「魔術師」であることを宣言するだろう。

このように書くと、多くの人はOTOの内部には、秘めたる崇高なFormulaが存在していると誤解するかも知れない。クロウリーが明示したこの魔術の術式は決して特殊なものではなく、その術式を明確に知っていようがいまいが、それは人生を生き抜く為の極めて普遍的で語り尽くされた法則なのである。その法則は、あなたの創作活動に、ビジネスに、恋愛に、人間関係に、その他の大小様々な人生の諸問題に対処することができる。とはいえ、それを厳密に実行することは、そうそう容易なことではなく、OTOによる指導は優れた人生哲学の基盤となるだろう。ちなみにクロウリーは、彼の代表的な著作である『魔術-理論と実践』の中で堂々とその術式について述べている。ただし、その記述方法にはヴェールがかけられており、混乱を齎すものでしかないかも知れない。

「黄金の夜明け」団から発展したクロウリー自身の魔術結社 A.:A.: は、厳格な試験団体であり、その目標は Great Work の完成にある。志願者は厳密精緻で固定的なカリキュラムに挑み、それを一つ一つ打破していかねばならない。いわば、「生命の樹」の上昇という目標に対して、類まれなる思惟と行動で少しずつそれを実現していく力が必須である。A.:A.: は垂直上の Great Work を指導し、そこからの逸脱を非難する。ただし、一つの転生における魂の発達に対しては、絶大なる力を持っている。西洋の秘教団体としては、東洋の洗練された修業体系に対抗できる唯一の体系であるといっても過言ではない。対する OT0 のアプローチは垂直的な上昇ではなく、平面的な敷衍を実現する。彼らは厳密な意味で、マルクト以上に飛翔することはないが、それ故にその対象は現実社会（マルクトたる王国）そのものに置かれている。その骨格には 18 世紀以降のフリーメーソンリーの秘教的枠組みが配置され、それを「セレマの法」によって刷新している。

もしあなたが、「セレマの法」を微塵も受け入れるつもりがないならば、勿論 OT0 への入団など及びもつかないことだろう。他方、「セレマの法」に対する絶対的な関心がなくとも、OT0 は志願者に対してその門戸を開放している。「セレマの法」の四つの贈り物である〈光〉、〈生命〉、〈愛〉と〈自由〉は、OT0 の第二位階の「魔術師」に開示される術式とリンクしている。我々は、それによってイニシエートの壮麗なピラミッドを建築する。

更に OT0 の魔術の本質は「創造」である。アレイスター・クロウリーは『アレフの書』、又は「叡智と愚行の書」の 86 章に於いて「魔術の完全術式」のことをこう記述している。

「ここに魔術のあらゆる作業のスケジュールがある。まず、最初に汝は真の「意志」を見出すべし。私は既にそれを汝に教示した。その「蓄」こそは、この「作業」の「目的」なり。」

「続いて、「蓄 - 意志」を「人」として定式化せよ。見出し、またそれを構築すべし。汝の「聖なるカバラ」とその「真理」の絶対確実なる規則によって名前を付けるが良い。」

「第 3 に、この「人」を浄化し、聖別すべし。彼と彼に抗う他の全てに集中するが良い。この「準備」を汝の日々の生活に於いて継続せよ。準備が整ったならば、それぞれの「誕生」の後、すぐさま新しい「子供」が現れよう。」

「第 4 に、「ミサ」によって特別、且つ直接に「召喚」すべし。入祭文とともに可視なる「子供」の心像を定式化し、「受肉の権利」を差出したまえ。」

「第5に、聖霊を求める祈りと共に「ミサ」を執り行え。汝の「獅子」と汝の「鷲」の結婚に「黄金の婚礼指輪」を供えよ。」

「第6に、程よくそれが汝に吸収されるまで行うが良い。汝の「意識」すらも打ち負かし、受け入れた「子供」を「聖餐式」により摂取するのだ。そして、それを継続せよ。それが「強さ」と「技能」となるまで繰り返すのだ。汝が、時間の許す限りこれを行えば、その「効果」は累積的なものとなるであろう。」

アレクスター・クロウリーは、上記の象徴と暗喩に満ちたこの術式こそが、OTOの魔術の本質であると捉えていた。アイオンの魔術はOTOに秘匿され、誤解を受けながらも現代の魔術師達へと連綿と受け継がれているのである。

5. OTOの位階構造

OTO全体の位階制度は13の正位階と8の副次位階によって構成されている。それは「永久への径」であり、連続する秘儀の体験である。



★三番目の「大地の男」の三つ組み(The Third, or Man of Earth, Triad)

- ・第零位階 0° ミネルヴァル Minerval
- ・第一位階 I° 男にして兄弟、女にして姉妹 Man and Brother Woman and Sister
- ・第二位階 II° 魔術師 Magician
- ・第三位階 III° 親方魔術師 Master Magician
- ・第四位階 IV° 完全なる魔術師 そして エノクのロイヤル・アーチの同胞
Perfect Magician and companion of the Holy Royal Arch of Enoch
- P. I. 完全なる参入者 または エルサレムの王子
Perfect Initiate, or Prince of Jerusalem

★全ての三つ組みに属さない位階 (Outside all Triads)

- 東と西の騎士 Knight of the East and West

★二番目の「恋人」の三つ組み(The Second, or Lover, Triad)

・第五位階 V° 薔薇十字元首, そしてペリカンと鷲の騎士

Sovereign Prince Rose-Croix, and Knight of the Pelican and Eagle

-赤鷲の騎士, そしてヘルメス哲学者騎士の上院議会員

Knight of the Red Eagle, and Member of the Senate of Knight Hermetic Philosophers

・第六位階 VI° カドッシュ団の卓越した(聖堂)騎士 そして聖杯の同胞

Illustrious Knight (Templar) of the Order of Kadosch, and Companion of the Holy Graal

-検察審問官 そして大法廷の成員

Grand Inquisitor Commander, and Member of the Grand Tribunal

-ロイヤル・シークレットの王子

Prince of the Royal Secret

・第七位階 VII° 位階 セオレティカス そして大いに卓越した神聖大総監

Theoreticus, and Very Illustrious Sovereign Grand Inspector General

-光のメイガス そしてグノーシス・カトリック教会司教

Magus of Light, and Bishop of Ecclesia Gnostica Catholica

-光のグランド・マスター そして諸儀礼と位階の監察官

Grandmaster of Light, and Inspector of Rites and Degrees

★一番目の「隠者」の三つ組み(The First, or Hermit, Triad)

・第八位階 VIII° イルミナティの完全教皇 Perfect Pontiff of the Illuminati

-イルミナティの予言者 Epopht of the Illuminati

・第九位階 IX° グノーシスの聖域の参入者 Initiate of the Sanctuary of the Gnosis

★三つ組みに関与しない特別位階

・第十位階 X° 至高聖王 Rex Summus Sanctissimus

・第十一位階 XI° 第11位階の参入者 Initiate of the Eleventh Degree

・第十二位階 XII° 頂点たる兄弟 そして 団の外なる首領 Frater Superior, and Outer

Head of the Order

我々OTOが現在保持しているこれらの一連の位階参入儀式のうち、「大地の男」と呼ばれる位階の儀式についてはOTO全体の活動の中心ともなるものである。以下にOTOの諸位階の概略を述べよう。

“成年に達し、自由で風評良きどの男女にも、OTOの最初の三位階を授かる、破棄できない権利がある。ただし、〈ミネルヴァル〉は〈第一位階〉の前触れで、〈第四位階〉と〈P∴I∴位階〉は「第三位階」にぶら下がる終結部であることを考えれば、その「最初の三位階」には「大地の男の三つ組」の全位階が含まれていることが解る。”

また「団の憲法への言及と通達(An Intimation with Reference to the Constitution of the Order-194の書)」に記された下記の記述はOTOの「大地の男」の位階にいる参入者の理解の一助となるものである。

“1. これは我らの神聖なる団の憲法および行政である。その均衡を学ぶことによって、あなたは如何にしてあなたの人生を規定すべきかについてあなた自身を以って理解するであろう。真実のために、他者の中の一人として想像してみる。人とは宇宙の地図であり、社会とは同一にしてより大きなスケールの宇宙の地図である。”

“2. 我らの聖なる団は、「法の書」に書かれている三つの真の位階、「隠者」、「恋人」、「大地の男」によることを学ぶべし。”

“3. それらの位階は便宜を図るため、三つの三つ組みに分割されている。”



“4. 三番目の三つ組みは〈ミネルヴァル〉から〈エルサレムの王子〉までの位階で構成されている。ミネルヴァルの位階は第一位階の前触れであり、第三位階より続く諸位階は、それにぶら下がるものである。大地の男のこれらのシリーズには三つの位階があるが、この三はまた一でもある。”

“5. 大地の男は団の行政には関与しない。我々にとって行政とは奉仕であり、他のなにものでもなく、彼はその奉仕のために人生を捧げるようにはまだ要求されてはいない。それゆえに「大地の男」はメネニウス・アグリッパの時代におけるローマのプレビアン（平民）とほぼ同じ位置づけとされる。とはいえ、顕著な違いもある。全ての「大地の男」は次の段階へと邁進することを促進され、期待されもするのである。全身の感覚で適切に表され得るであろう、至高にして神聖なる王たる父の顔の前に絶えず立ち、昼夜を問わず仕えるために「大地の男」は彼らの中から二人の男性と二人女性である四人を選ぶであろう。彼

らは<第二位階>以上の者であってはならず、儀式の終わりにあたり奉仕をするボランティアでなければならない。それゆえに一年間は団での昇進を諦め、彼らの同僚に奉仕することとなる。これは放棄を通じて榮譽を獲得する、我々の偉大なる原理についての最初のレッスンである。”

「大地の男」の位階の儀式には下記の6位階の儀式が含まれる。

「大地の男の三つ組」

第零位階 0° ミネルヴァル Minerval

第一位階 I° 男にして兄弟、女にして姉妹 Man and Brother Woman and Sister

第二位階 II° 魔術師 Magician

第三位階 III° 親方魔術師 Master Magician

第四位階 IV° 完全なる魔術師 そして エノクのロイヤル・アーチの同胞

Perfect Magician and companion of the Holy Royal Arch of Enoch

P. I. 完全なる参入者 または エルサレムの王子

Perfect Initiate, or Prince of Jerusalem

ここでOTOの主な活動体について述べる必要がある。OTOはキャンプ、オアシス、ロッジという三種類の活動体によって維持されている。キャンプはOTOの拠点の中で最も権限の少ない活動体であり、主にメンバー間の勉強会を中心とした相互扶助をその活動の中心にしている。OTOでは第一位階以上の参入者にキャンプ設立の権利が与えられる。ただし、近隣にOTOの活動体が存在しない場合に限られる。オアシスは第三位階以上の参入者に設立の許可が与えられ、その権限は少し広がり、オアシスの代表者(マスター)が国際総本部の認可を得ることによって第零0°～第三位階までの参入儀式を授けることが可能となる。

ロッジは第五位階以上の参入者に設立の許可が与えられ、ロッジでは第零～第三位階までの参入儀式に加えて、第四位階とその副次的位階である「完全なる参入者、またはエルサレムの王子」の参入儀式を主催することができる。第四位階、並びに「完全

なる参入者、またはエルサレムの王子」の参入儀式は、Sovereign Grand Inspector General (いと名高き神聖大総監) と呼ばれる 第七位階の参入者の指揮下において実施される。

「大地の男」の位階の上には「恋人」の位階(第五位階から第七位階)、さらにその上には「隠者」の位階(第八から第十位階)があり、団の外なる長 (Outer Head of the Order, O. H. O.) は第十二位階として OT0 の最高位に座している。2014 年 10 月 10 日、五つのグランド・ロッジの投票によって団の外なる長に選出された兄弟ハイメナエウス・ベータは、世界で唯一人、第十二位階を保持する OT0 の世界的リーダーである。

OT0 の「大地の男」と「恋人」の位階の間に位置している<東西の騎士>の務めは下記に要約されている。この位階はあらゆる三つ組みには含まれず、いわば独立した位階である。

“6. <東西の騎士>は第 1 と第 2 のシリーズの間の橋であるが、それは重要な位階である。この位階では、新しい誓約形式に署名がなされ、また、新しい騎士は、Thelema の法の構築に彼の生活を捧げることを誓う。” 194 の書

<東西の騎士>に到達した魔術師は、OT0 の中核的儀式である「グノーシスのミサ」の司祭(男性の場合)、又は女司祭(女性の場合)として聖別される権利を持つことになる。また助祭は男女の性別に関係なく、<第二位階>に到達することにより、その権利が授与される。ただし、明確に「グノーシスのミサ」を挙行すべく自らでその意志を表明した者でなければ、この権利を享受することはない。

興味深いことに「恋人」の位階の最初の位階である<第五位階>は薔薇十字の秘儀と結び付けられ、また象徴的には「生命の樹」のティファレトに照応していると思われる。ただし、OT0 の位階制度はカバラの「生命の樹」とは対応していないのは注意すべきである。また<第五位階>の参入儀式についてはチャプターと呼ばれる独立した活動体で行われる。かつて(2007 年～2012 年) OT0 Japan は OT0 New Zealand とともに、SAKURA チャプターを組織していたが、現在このチャプターは解散している。New Zealand は独自のチャプターを自国で組織しており、日本にチャプターには存在していないが、近い将来、チャプターが再び設立されることが待ち望まれている。またチャプターは、世界中に存在しており、OT0 Japan のメンバーは、次の二つの方法により第五位階に進むことができる。1. 他国のチャプターでイニシエーションを受ける。2. 海外よりチャプターの High Priestess を招待し、日本で臨時のチャプターを設け、イニシエーションを受ける。

“7. 第5位階のメンバーは、団の全ての社会奉仕に責任がある。この位階は象徴的に美と調和を表している。それは大多数の男女が滞在する自然な場所であり、更に前進するための最も厳しい種類の放棄を含んでいる。そしてここに諸界における全ての喜び、平和、幸福がある。〈薔薇十字の最高王子〉は高きもの、低きものを同等視し、両者間に自然なリンクを形成する。まだ彼には期待させておくだけだが、彼の視線は高みへと向けられているのだ!” 194 の書

〈第六位階〉における中心的なテーマは神秘的な聖堂騎士団の物語である。恐らく、この参入儀式はOTOの数ある儀式の中で最も崇高で、雄大なるものである。ここにおいて全ての騎士は、秘教的な聖堂騎士団の、そしてThelemaのエッセンスによって昇華された秘儀を体験することになる。この位階の儀式は、現段階では日本では実行不可能であり、志願者は海外においてその位階を授かることになる。日本では、一般的にオーストラリアのグランド・ロッジにて、その位階を授与される。

“15. 第六位階は至高にして神聖なる王の世俗的な力を現す指導部にして軍事的組織である。各メンバーは軍事的規律には従順である。単独、あるいは戦友と協力して、各々の騎士は権威の決定を強化することを誓う。” 194 の書

ここでOTOにおける二重構造について述べなければならない。〈第零位階〉から〈第七位階〉まではクロウリーが英国に設立したM.:M.:M.: ミステリア・ミスティカ・マキシマの位階として分類されている。そして〈第七位階〉から〈第九位階〉までの三位階はOTOのルーツの一つでもある「光のヘルメスの同胞団」の位階としてFraternitas Lucis Hermeticaと呼ばれている。つまり第七位階はM.:M.:M.:の最後の位階にして、Fraternitas Lucis Hermeticaの最初の位階でもあるのだ。つまり〈第七位階〉から〈第九位階〉までの高次の秘儀は性魔術に関連している。〈第七位階〉もまた現在日本で授かることは不可能である。この位階もまた海外にて授かることになる。〈第七位階〉に到達した団員は「グノーシス・カトリック教会」の司教へと任ぜられることになる。

“18. 第七位階は軍事的用語では、第六位階の大参謀である。至高にして神聖なる王は、このメンバーの中から最高大評議会のメンバーを任命する。” 194 の書

〈第八位階〉は「隠者」の三つ組みの最初の位階となる。また「イルミナティの秘密最高法廷」の構成員は、この位階に達した選ばれた団員により構成されている。

“20. 〈第八位階〉は哲学的組織である。そのメンバーは団の諸原理の完全な教育を受け、イニシエーションの教えに対する理解に彼ら自身を捧げること一点に専念する。彼らは最高法廷の決議を撤回し、行政機関間のあらゆる論争について収拾する力を持つ。

これを彼らは哲学の偉大なる諸原則で実施する。それはしばしば生じるであろう当事者間の論争のためである。片方の視点からすれば彼らは常に正しいことなるのだから。これは非常に重要なことであり、事例を挙げるのが望ましいだろう。ハンセン氏病を患った男がいる。この男が彼の仲間から孤立させられることによって彼の自由を束縛されるとしたら、それは正しいことと云えるだろうか？ 他の者は彼の土地や、公共物などから幾つかの必要なものを制限する。彼はそれらについて屈服させられることについて強制されるのであろうか？ このような困難な問題は深い哲学的諸原則を含んでいる。〈第八位階〉のアレオパグスは団の偉大なる諸原則に従ってそれらを解決する義務を負う。”

194 の書

〈第九位階〉は「グノーシスの至聖書」と呼ばれる実質、最高位の秘儀伝授の場である。この位階に於いて、クロウリーがアイオンの最高の魔術術式と呼んだ秘儀が伝授されることになるが、ここではその詳細を述べる事は出来ない。

“23. 第九位階-グノーシスの至聖所は総合的な位階である。この位階のメンバーの第一義的義務は、位階の魔術と奇跡の学習と実践である。更に、至高にして神聖なる王が世界に放つ光の直接的な代理人としての準備をしなければならない。彼らの秘儀参入の性質から未だ彼らの栄光は雲と闇の中にありヴェールで覆われている。彼らは我々のもっとも若きもの達の間を見えざるまま、認識されないままに移動し、巧妙且つ高尚に、我々を神聖にして言語を絶する真実の光へと導くのである。” 194 の書

〈第十位階〉は至高聖王 (Rex Summus Sanctissimus) と呼ばれる各国の王である。厳密には、世界に五つ存在しているグランド・ロッジのグランド・マスターに与えられる位階である。現在、世界にはアメリカ合衆国の兄弟 Sabazius、英国の兄弟 Hyperion、そしてオーストラリアの兄弟 Shiva、イタリアの兄弟 Phanes、クロアチアの兄弟 Abrasax の 5 名が〈第十位階〉のメンバーとして君臨している。グランド・マスターは自国の OT0 のグランド・ロッジを統治し、運営方針の権限を担っている。いずれにしても長い年数 OT0 に貢献し、自他ともに認める業績を残した数少ないメンバーにのみ、与えられる栄えある位階であることに間違いはない。

団の最高責任者である O. H. O. には現在第十二位階が与えられている。この最高責任者の席には現在カール・ケルナーから数えて 6 代目となる兄弟 Hymenaeus Beta が就いていることは前述の通りである。彼はクロウリーの数々の著作の編集を担当し、またそれらの著作に有益な序文と詳細な注釈を付与している。

“27. O.H.O. は団の最高権威であり、彼が認めた非常時などに決断を下す。彼は彼自身が職務から身を引くこともできるが、この職務につくためには第十位階の満場一致の決定でのみ選出される。” 194 の書

〈第十一位階〉は特別な位階であり、また特殊な意味がある。この位階は性魔術に関連してはいるものの Fraternitas Lucis Hermetica の位階には含まれていない。

“28. 〈第十一位階〉はいかなる位階に対してもその力、特権、資格により言及することはできない。団の全般的な計画には関与せず、計り知れないまま、彼自身の宮殿に住まう。” 194 の書

OTO の上位の位階については、その詳細は覆い隠されている。とはいえ、全世界的な OTO の参入者の約 9 割は「大地の男」の構成員である。それ以上の位階に進む者は比較的少数かも知れない。何故ならば、「大地の男」以上の位階は全て招待により召集されるからである。しかし、熱意ある魔術師は最初の招待位階である「東西の騎士」の位階に招かれ、Thelema の法を自らの生活の内に打ち立てることによって「恋人」の位階に召集されることだろう。OTO のこのようなヒエラルキー体質は決して我々の「自由な意志」を阻害するものではない。このような疑念に明確な回答を得るためには、ミネルヴァル位階の哲学的な瞑想を経る以外にはないだろう。また真義は、参入者によって判断・理解されることであろう。



ここで再び「大地の男」の位階を鳥瞰する作業に戻ろう。これらの一連の位階は OTO の集団作業の大部を占めることになるのである。

“「大地の男」一連の位階は、チャクラの象徴形態とクンダリーニ・ヨガの各段階に基づいた様式に添っている。また「無窮」に於いての「個人の道」を、劇的な形で表わしている。〈第零位階〉では、彷徨う「神」である「自我」が、「太陽系」に魅き付けられる。〈第一位階〉では、「子供」が「誕生」を体験し、〈第二位階〉では、「男」あるいは「女」として「人生」を体験する。〈第三位階〉は、個人の「死」を、そして〈第四位階〉は死後の世界と「参入者」の栄誉ある様子を表わす。〈P ∴ I ∴ 位階〉では、参入者が象徴的に「極致」を達成し、周期全体は「無」に引き戻される。”

“これら「径」の「場面」の内、〈第二位階〉以外のものは、全て単一の重大な体験を表現している。しかしながら、我々の関心は多様性溢れる「人生」にあるが、「人生」

に関連する「参入者達の教え」を、例えほんの概略だけでも、たった一つの儀式で描くことはまず無理なので、〈P ∴ I ∴〉より上の全位階は〈第二位階〉の詳述、生き方についての過程的な指導、になる。よって、〈第五位階〉から〈第九位階〉までの儀式や教えはつまり、「参入者」への「人生の熟練」の指導である。ヘルメス哲学やカバラ、西洋魔術、ヨガなどの指導があり、この全ては志願者を、OTOの最高諸位階の性魔術技法に向けて準備を整えさせるためのものである。”

「大地の位階」の6位階とその儀式は連続した神の冒険の祝祭であり、劇的儀礼として有機的な連続性を有している。志願者は、この壮大なるドラマを劇中の主人公として直接的に体験することになるだろう。

- 第零位階 Minerval 「彷徨える自我は太陽系に惹き付けられる」
- 第一位階 Man and Brother 「誕生」
- 第二位階 Magician 「人生」
- 第三位階 Master Magician 「死」
- 第四位階 Perfect Magician 「死後の世界への参入」
- 完全なる参入者、もしくは Prince of Jerusalem (P ∴ I ∴) 「無への回帰」

またクロウリーは、「大地の男」の儀礼の各々の段階を下記の言葉で要約している。

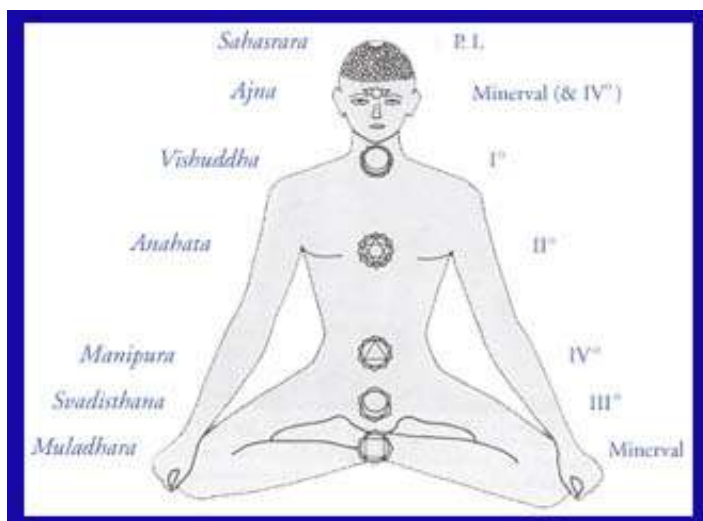
- 第0位階 「歓迎」
- 第一位階 「秘儀参入」
- 第二位階 「聖別」
- 第三位階 「献身」
- 第四位階 「完全、または高揚」
- P ∴ I ∴ 「完全なる参入者」

最初に述べた通り、この劇的儀礼において活用される寓意と象徴は、それそのものを理解するために一定の熟成期間を必要とする。「大地の男」の位階における一連の秘儀参入は、いわば「彷徨-誕生」から「無」へと回帰する「大いなる技」の完成を示唆している。一般的に西洋の秘教伝統では、殊更に「死と再生」のモチーフが強調される。OTOの儀礼の中に存在する「死」の寓意は全世界に共通する神話の概念を超越している。それは「死後の世界」の体験を超えて、「無」へと回帰するものである。これはクロウリーが提唱した「大いなる技」のプロセスにおける最後のクライマックスともいえるべき「深淵超え」をそのモチーフとしている。OTOの非参入者はまず彷徨える放浪の「個」

として、ある特有の周期に捉えられることになる。Thelema の法は、彼が屹立し前進するための最強の武器であり、それは彼をしてある真理へと導く。続く「誕生」は、所謂「二度生まれ」の秘儀と相俟って、志願者に新たなる周期への参入、完全なる始まりを教示することになるだろう。誕生を経て体験する「人生」においては艱難辛苦が待ち受けている。OTO の参入者には、その困難に対処する知恵が授けられる。それは、クロウリーがエリファス・レヴィの時代（かれはレヴィの生まれ変わりを自称していた）から強調していた人生への最良の対処法である。そして彼が「死」を経験する時、本当の物語が開始されるといっても過言ではない。「死の超越」と「無への回帰」については、クロウリーが人生を賭して追及していた一大テーマである。これらの寓意と象徴は、クロウリーによって彼の著作の中に分散的に書き記されてはいるが、その連続性の体験は

OTO に参入することによって「体験知」としてもたらされる。”秘儀参入の奥義は、決して書物に書き表せるものではない”、これこそが志願者が OTO から学ぶ最大の教訓になることだろう。

「大地の男」の諸儀式はクンダリーニ・ヨガにおけるチャクラが関連していると OTO は主張する。この関係について、下記の



対応が公開されている。

- 第零位階 アジナ・チャクラ、ムーラダーラ・チャクラ
- 第一位階 ヴィシュダ・チャクラ
- 第二位階 アナハタ・チャクラ
- 第三位階 スバディシュターナ・チャクラ
- 第四位階 マニピューラ・チャクラ、アジナ・チャクラ
- P ∴ I ∴ サハスラーラ・チャクラ

各々の志願者は各チャクラに対応した「体験」と「サイン」を授かる、というところまでは書いても問題ないだろう。それぞれの位階では対応するチャクラは瞑想の対象となり、また儀式の体験そのものを想起する際の焦点となるよう設計されている。これらの創意工夫はクロウリーのオリジナルである。繰り返し強調することになるが、OTO の参

入儀式は一度受けただけで終わりではない。参加者は、多くの場合自分自身が授与された位階の教義について、最初のうち幾分戸惑うに違いない。OTOの参入儀礼とチャクラとの関連性の理解は長期に渡る研究の対象であり、その理解のためには、自分自身が秘儀参入を授与する場面—即ちイニシエーター、もしくは儀式の司官—として、どれだけ多くの儀式執行の場に立ち会えるにかかっていると云っても過言ではない。埋め込まれた種子は反復によって発芽し、成長するのである。この利点の故に、秘儀参入の儀式は、古来より人類に活用され続けてきたのかも知れない。

「大地の男」のすべての位階の参入儀式を通過した体験から云うと、そこから得た知識と体験の総計は、今後の魔術活動で何度となく繰り返され、再考察される最良の題材になることは間違いない。おおよそ、以下の項目についてOTOの儀式は啓発を与えてくれるだろう。

- ・セレマ哲学へのイントロダクション、「自由な意志」について
- ・魔術的誕生について、またその秘儀について
- ・人はいかに生きるべきか？ 正しき知識と勇氣について
- ・真実を知る者の試練、あるいは克服について
- ・再生の秘蹟、言葉・記号に秘められた秘儀の解析について etc etc etc

志願者がこれらの連続的な参入儀式を体験し、P:~I:~に達し、「大地の男」と「恋人」の位階の間である<東西の騎士>の位階に達した頃には、彼は「大地の男」の一連の儀礼を有機的に咀嚼、整理し、その流れの中に一貫性を認めながら、OTOの参加者としての務めを理解するようになっているだろう。

“これがOTOの行政の簡潔なアウトラインである。それは君主制と民主主義の組み合わせであり、貴族制度を含んでおり、その単一の進行の結果によって革命の種子さえも隠匿する。このようにして我々は三つ組みを均衡させ、三を一へと結合させるのだ。このようにして我々は人間の情熱と関心の全ての糸を集め、大いなる芸術とともに巧妙かつ、入念にそれらを調和のタペストリーへと織り込むのである。我々の団は夜の天にある星々においてさえ飾りに見えるかもしれない。虹で着色された織物の中で、我々は全宇宙の栄光を示す——汝、見よ、兄弟たる魔術師よ、汝自身の糸は強く純潔であり、その色彩は本質的に輝きである。今、汝の同胞達の全ての美に溶け込む準備はととのった!” 194 の書より



6. 「大作業」への挑戦

続いて OT0 における魔術の学習法についての私見を述べよう。まず「私見」という言葉について。OT0 は公的には教育団体ではない。従って、OT0 魔術師が OT0 を通じて、如何にして魔術を学んでいくか?というテーマについては個々に委ねられた固有の問題となる。また OT0 が教育団体か否かについては、時折メンバー間で議論される問題である。OT0 には段階的かつ明確な学習カリキュラムが存在しないのは確かだ。しかし、これには理由がある。前述の通り、OT0 の参加者としてのカリキュラムは、参加者が**自分で構築すること**になっているからだ。この点において、参加者には各人各様の様々なカリキュラムが存在し得るのである。それは参加者個々の「人生」のパターンに準拠し、またそのそれぞれが尊重されるべきである。

とはいえ、OT0 への参加を果たした参加者にはそれぞれの位階の参考書として「学習の指針（スタディー・ガイド）」が手渡されることになるだろう。スタディー・ガイドにはその位階における然るべき学習図書と、簡潔な論文が収められている。正にそれらは学習の指針として参加者の学習の糧となるものである。OT0 には各位階に対応した「魔術訓練カリキュラム」や「魔法日記の提出の義務」などはない。そしてその理由は先に述べた通りである。

クロウリーのもう一つの魔術団体「銀の星」団(A.:A.:)は明確に個の霊的発達を目的とした訓練の場であり、定められたカリキュラムのもと徹底した学習意欲とテストに合格するための理論・実践の蓄積が求められた。「銀の星」団には、ロッジや集団儀礼という概念は存在せず、公的には一人の学習者が知りえる他の団のメンバーは魔法日記を提出する直属の指導者一名のみである。「銀の星」団とは明確に異なり、OT0 はセレマの法を受け入れた Thelemite が集い、共同での活動を推進する同胞団(Outer Thelemic Order)という位置付けであった。「銀の星」団における「大いなる技」は、OT0 の「大地の男」の位階における「大いなる回帰への径」をより具体的に体現するものであると定義できるかもしれない。第一に「銀の星」団は、教育団体でもあり、また厳格な試験団体(Testing Order)でもある。「銀の星」団における「大いなる技」の三段階は” 聖守護天使の幻視” ⇒ ” 聖守護天使の知識と会話” ⇒ ” 深淵の試練” であり、それぞれが「銀の星」団の「外陣」(Outer College)、「内陣」(Inner College)、「第三団」(Third Order)に対応している。そして、それらの体験は寓意や象徴による秘儀参加で、連続的に体験されるのでない。「銀の星」団では象徴的な体験を超越して、実際に試練そのものを克服し、「達成」することが求められる。

OTO に話を戻すと、近年の研究発表や活動概況を考慮すると OTO には実践魔術の実力者が揃っていると断言できる。第一にクロウリーの実践魔術カリキュラムはほぼ全て公開されているという事実がある。OTO の魔術師は、実践のための指南書を探す手間など気にする必要はなく、『第四の書』や膨大な『春秋分点』誌を片手に系統立てて魔術を学習することが可能である。また実践上の質問については、自由に団の先輩魔術師にコンタクトすることが可能である。

あるいは OTO に所属する魔術師は、他の団体の魔術訓練カリキュラム、儀礼、実践に従事している場合も多々ある。OTO の参加者の中には儀式魔術師、ウィッカ、混沌魔術師などが多数在籍しており、OTO と並行してそれらの訓練体系に従事している (OTO Japan ですら、その傾向は同様である)。また熱意ある団員は、同時に A∴A∴へと志願するかも知れない。いずれにしても、OTO は「セレマの法」を公的に受け入れた初めての団であり、団の規律を乱さない限りに於いて、魔術師達の自由な活動と交流の場である。

OTO の最大のメリットは全世界に広がったネットワークの充実に他ならない。見知らぬ外国を訪問する全く初対面の同胞を歓迎し、助けるのは OTO の風習であると云えよう。魔術訓練の師を探すことは勿論、実践上のコメントを受けとること、情報交換などが世界中の OTO で活発に行われている。つまり、OTO の魔術師は個人の熱望の量に応じて、その恩恵を受けることが可能になっている。

一般的に OTO 参加者の多くは下記のようなスキームに則って学習していると推測される。

- ・イニシエーターとの参入儀式の象徴体系の学習
- ・OTO スタディー・ガイドに基づいた実践と理論武装
- ・クロウリーの公刊著作の解説とその実践
- ・OTO のロッジ、オアシス、キャンプでの集団作業、学習会
- ・団の中核的儀式である「グノーシスのミサ」への参列と学習

OTO の参加者にとっての有益な書物はアレイスター・クロウリーのものも含め、スタディーガイドに数多く記載されている。ここでは歴史的な側面、並びに実践的な側面について有益な図書について言及する。

現代は正に情報が溢れている時代である。前世期前半、アレクスター・クロウリーとその弟子達が活躍していた時代には勿論インターネットもなければ、ネットの大型書店も存在しなかった。彼らの交流を支えたのは無数に交わされた書簡であったし、然程多くは流通していなかったクロウリーの著作であった。翻って現代では、クロウリーの代表作はほぼ復刻され入手は容易になっている。そしてネットを経由して膨大なクロウリーの文書にアクセスすることが可能だ。かの百科事典並みの『春秋分点』ですら、ネットで閲覧可能な時代であり、我々は逆にこの情報社会に呑み込まれている。そうした状況の中にあっても、日本ではアレクスター・クロウリーと Thelema は驚くほど知られていない。その根本原因は言語の壁である。英国人であったクロウリーの著作はほぼ英語で執筆されている(しかも難解な英語で)。このことが大きな障壁となって、日本ではクロウリーの遺産はかなり限定的に紹介されているに過ぎない。とはいうもののクロウリーの文書、書籍を入手することは前述の通り簡単である。「本を頼らず、まずは実践を! 行動を!」成程、この意見には一理ある。しかし、繰り返し述べるが本邦でのクロウリーの紹介は、あまりにも限定的であるため、多くの志願者が、あまりにも Thelema に対して無知であるという状況が平然と発生している。ここでは、幾つかの有益な書籍を紹介するに留める。そして、それらの書籍は全て英語で書かれているという事実は別段驚くことではない。時代が進化したところで、相変わらずコンピューターの翻訳ソフトは貧弱であり、クロウリーの膨大な遺産にアプローチしようと思えば英語の読解は不可欠なのである。それは遠回りのようでも、我々日本人、そして OT0 の参加者にとっては、近道なのである。ここでは参考までに有益な参考図書を幾つか紹介する。

■Perdurabo, Revised and Expanded Edition: The Life of Aleister Crowley by Richard Kaczynski North Atlantic Books; Rev Exp edition

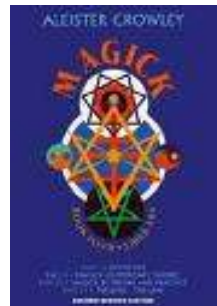
OT0 の有力メンバーによるクロウリーの伝記。詳細な歴史研究とクロウリーの魔術に関する解説が多く含まれている。クロウリーの伝記は、現在 10 種類程度は入手可能であるが、この本はそれらの伝記の中でも最も詳細で読み応えのある一冊である。

■The Unknown GOD: Martin P. Starr Teitan Press

かつて OT0 の第十位階として米国で活躍していたウィルフレッド・T・スミスの伝記である。この本は OT0 の活動を展開する現代の Thelemites にとっても極めて示唆に富む本であり、その価値は高い。この本は北米に設立された OT0 として初のロッジである アガペー・ロッジ No. 1、そしてカリフォルニアに設立された伝説的なアガペー・ロッジ No. 2 に関する極めて詳細で有益な研究書である。

■Magick: Book 4, Liber Aba (Magick Bk. 4) by Aleister Crowley, Mary Desti, Leila Waddell and Hymenaeus Beta Weiser Books; 2 Rev Sub edition

クロウリーの代表作として揺るぎ無い価値を持つ大作。8段階のラジャ・ヨガ概説、多彩な魔術用具の内的解説、1929年パリにて刊行された『魔術-理論と実践』、そして『法の書』に纏わる「カイロ・ワーキング」の詳細を収めた四部構成。編集者はOTOの現O.H.O.であるカリフ・ハイメナエウス・ベータであるが、巻末にある膨大な編集者脚注は圧巻である。クロウリーのMagickを学ぶ上では避けて通れない最重要書籍である。



■The Magick of Aleister Crowley: A Handbook of the Rituals of Thelema by Lon Milo DuQuette Weiser Books

■Understanding Aleister Crowley's Thoth Tarot by Lon Milo DuQuette Weiser Books

著者ロン・マイロ・ドゥケットは合衆国グランド・ロッジのグランド・マスター代理であり、魔術に関して多数の著作がある。最初の著作はクロウリーの幾つかの儀式、瞑想に関して実践的な見地から解説されている。恐らくOTOのメンバーが書いたクロウリーのMagickの実践解説書としては一番有名な本である。二冊目の本は、クロウリーのトート・タロットの解説本で、極めて解り易く、また纏まりのある一冊である。

■Abrahamadra: Understanding Aleister Crowley's Thelemic Magick by Rodney Orpheus Weiser Books

ロドニー・オルフェウスは、英国グランド・ロッジのグランド・マスター代理として活躍中である。本作ほど明快で初心者優しい書籍は他には存在しない。実践的Thelemaが、まず最初に手に取るべき本が本書である。

■Aleister Crowley And the Practice of the Magical Diary by Aleister Crowley, James Wasserman and J. Daniel Gunther Weiser Books

クロウリーの魔術的隠遁日記と、クロウリーの高弟であった兄弟エイカドの初期の魔法記録が一冊に纏められている。実践的なアプローチにおける記録の重要性については学ぶには最良の本であり、また編者であるOTOの高位階参入者ジェームズ・ワッシャーマンの卓越した序文が含まれている。

■The Law Is For All: The Authorized Popular Commentary of Liber Al Vel Legis Sub Figura CCXX, the Book of the Law by Aleister Crowley, Louis Marlow, Hymenaeus Beta and Louis U. Wilkinson Weiser Books

クロウリーの手による『法の書』の解説本である。OTO の活動の焦点ともいえるこの書物は、正に謎に満ちた現代の預言書である。

■Gems from the Equinox: Instructions by Aleister Crowley for His Own Magical Order by Aleister Crowley and Israel Regardie Weiser Books

クロウリーによる定期刊行物『春秋分点』誌からの選りすぐりである。可能ならば、『春秋分点』誌の全巻を入手することが望ましいが、まずはこの一冊を入手することをお勧めする。編者イスラエル・リガルディーは高名な「黄金の夜明け」団の実践家にして解説者である。

■The Equinox: The Review of Scientific Illuminism, Vol. 3, No. 10 by Aleister Crowley and Hymenaeus Beta X

主にクロウリー時代の OTO に関する一連の文書を網羅した一冊。団の歴史、構造に関してクロウリー自らが、または現代の OTO メンバーが解説を加えている。

■The Holy Books of Thelema by Aleister Crowley Weiser Books

13 種類の「聖なる書物」(「銀の星」団の A 級文書)を全て含んだ一冊。5 代目の O. H. O. であるグラディ・ルイス・マクマートリーの解説は、それらの文書の重要性や理解への手引き等に関して極めて有益な示唆を与えてくれる。『法の書』のみならず、全ての「聖なる書物」の重要性を理解するために本書に日々親しむことをお勧めする。

■To Perfect This Feast: The Gnostic Mass: Revised Second Edition by James Wasserman, Nancy Wasserman and Aleister Crowley Publisher: Sekmet Books

ワッシャーマン夫妻による「グノーシスのミサ」の解説本。両者は共に「グノーシス・カトリック教会」の僧正であり、数多くの体験に裏打ちされた明快で解り易い解説を行っている。「グノーシスのミサ」については、合衆国のグランド・マスター、兄弟 Sabazius が執筆した RED FLAME 第二号により詳細な解説が含まれている。ただし、この本は 2014 年にバークレーの Conjoined Creation から増補版が刊行されている。

■Initiation in the Aeon of the Child: The Inward Journey by J. Daniel Gunther
Ibis Press

著者は、OTO のメンバーではなく、「銀の星」団の卓越した達人である。彼の著述は、これまで「銀の星」団の内部で口伝でのみ伝えられていたトピックが多く、極めて斬新かつ衝撃的である。本書は「銀の星」団の B 級文書としてクレジットされているが、クロウリー自身の重要な他の著作と比べても何ら劣る部分はない。クロウリーの死後に出版された本の中で、クロウリー以外の魔術師によって書かれた多くの本の中では群を抜く出色の出来栄である。初心者向けの著作ではないかもしれないが、この本は全ての Thelemite によって最低 100 回は読み返されるべき最重要書籍である。



ここでは OTO の参入者が Thelema を学ぶのにおいて有益な本を幾つか紹介した。その中には極めて重要な著作、例えばアレイスター・クロウリーの『アレフの書』や『虚言の書』、『トートの書』や『777 の書』すら含まれていない。クロウリーの著作は、いずれにしても一度読んだだけで理解できるものではない。ここに掲げた参考図書は、”最初に読むべき本”の単なる一例に過ぎない。どのような本を、どのような順番で、どのように読むか？これも OTO の個人に託された選択の問題だといえるだろう。

書籍の入手について問題となるのが既に絶版となった書籍の入手方法である。この問題については下記のサイトが最大の見方になってくれるはずである。

<http://www.abebooks.com/>

7. OTO の組織

組織としての OTO は、フリーメーソンリーの影響下にあり、それは団の歴史に由来している。全世界の OTO を統括する国際総本部は、団の外なる首領である兄弟ハイメナエウス・ベータによって統治されている。位階との関連で、OTO の上位の位階の参入者は、以下の組織を形成している。

- ・国際総本部 International Headquarters
- ・最高法院 Supreme Council

最高法院は、兄弟ハイメナエウス・ベータを筆頭として、二名の長官がそれを補佐している。秘書長官は、全世界の参入者あるいは外部からの問い合わせに対しての回答を実施し、専ら団内外のコミュニケーションを担う重責である。財務長官は名前の通り、団の財政面を管理し、また団の運用面を補佐している。また五つ存在する各国のグランド・ロッジに於いても、その管理運営の為に、最高法院が置かれている。

・革命派 Revolutionaries

・第九位階のグノーシスの至聖所 The Sovereign Sanctuary of the Gnosis of the IX°

・第八位階のイルミナティの秘密最高法廷 The Secret Areopagus of the Illuminati of the VIII°

・第六位階の大法廷 The Grand Tribunal of the VI°

・グランド・ロッジ The National Grand Lodge

各国のグランド・ロッジにはそれぞれグランド・マスターが任命されている。現在世界には五つのグランド・ロッジが設立されており、それぞれの国を統治している。

・執行委員会 Executive Council

・最高大法院 The Supreme Grand Council

ここには各国全体のコミュニケーションを担う秘書大長官とグランド・ロッジを財政面において統括する大財務長官が任命されている。

・選挙人団 The Electoral College

一般に 11 人の第五位階の参入者から組織され、主に「大地の男」の位階の活動を監督している

先にも簡単に触れたが、OTO の活動体は大きく三種類があり、キャンプ、オアシス、ロッジの順に参入儀式に関する権限が拡大される。ここに再確認の意味で簡潔に記述する。

●キャンプ：最小規模で、参入儀式を行うことは要求されない。〈第一位階〉以上の参入者にその設立の許可が与えられる。

●オアシス：〈第零位階〉から〈第三位階〉までの参入儀式を許可される。その為には国際総本部より秘儀参入儀式を授与するための特許状が必要となる。

●ロッジ：オアシスの権限に加え、〈第四位階〉、並びに〈完全なる参入者〉までの参入儀式が可能になる。

キャンプ、オアシス、ロッジの各活動体がOTOの活動の主な場であることは間違い無い。また先に述べた通り、第五位階の秘儀参入は「チャプター」と呼ばれる別の活動体でのみ実行が許されている。これらの活動体のネットワークは、今や全世界に拡大している。その中でも最もアクティブに国はアメリカ合衆国である。特にカルフォルニア州、ニューヨーク州、テキサス州、オレゴン州は世界的にみても最もOTOの活動が活発な地域である。ヨーロッパでは、グランド・ロッジの存在する英国を筆頭にドイツ、イタリア、ノルウェー、スウェーデンに加え、東欧諸国でもOTOは活発に活動している。ロシア、ブラジルの2国は着実にOTOが拡大している国であり、またグランド・ロッジのあるオーストラリアもOTOがアクティブな国である。国際総本部の管轄下において、グランド・ロッジが存在しない国々でも各国単位での監督組織が形成されている。OTO Italia, OTO New Zealand, OTO Norway, OTO Russiaなどが、そういった国単位での監督組織であり、個別に各国の代表（OTOの外なる首領、兄弟ハイメナエウス・ベータの各国の代理人）FSRと国家秘書、国家財務の担当者がそれぞれ任命されている。

8. グノーシス・カトリック教会

キリスト教における聖霊の概念は、三位一体である神の三つの位格のひとつとして定義されている。聖霊は人に宿る神の霊であり、その語源を辿るとヘブライ語のルアク、ギリシャ語のプネウマに行き当たる。即ち、土くれに吹き込まれた神の霊的な息吹、生命の原動力そのものである。カトリック教会における聖餐（聖体の秘跡）は、キリストの最後の晩餐にその起源を見出すことができ、パンと杯をもってキリストの肉体と血とし、キリストの現存を体感する手段としている。ミサは共同体の信仰を維持するための重要な儀式として絶えることなく今日まで続いてきた。初代教会では「アガペーの食事」と呼ばれる神聖な儀式があり、同じくパンとワインを分け合うことによって、キリストの最後の晩餐を想起し、信仰を鼓舞していた。カトリックにおける聖餐と聖体拝受はミサの中核として位置付けられ、信者は一様にその秘蹟に与ることになる。ここに彼らの魔術が存在している。即ち、宗教改革以降のプロテスタント教会とは異なり、カトリックではこれを単なる象徴と見做すことなく実際のキリストの血肉としてそれを拝受するのである。

OTOは、グノーシス・カトリック教会(Ecclesia Gnostica Catholica)を内包している。グノーシス・カトリック教会はフランス起源の流れであり、1908年にセオドア・ルイスと親交のあったパピュスこと、ジェラルド・アンコース博士に





よってOTOに初めて導入された。現在のグノーシス・カトリック教会は、Thelemaの法によって「光と命、愛、自由」に於いての発展に専念する、Thelema的宗教環境を担っている。

グノーシス・カトリック教会の中心的活動は、勿論「グノーシスのミサ」の挙行である。『第十五

の書』と題されるこの儀式は、アレイスター・クロウリーが1913年にモスクワにおいてOTO用に作成したものだ。グノーシス・カトリック教会への加入は、洗礼と堅信礼によって行われる。OTOの正式会員は聖職者としての教育や聖職叙任を受けることができる。

全世界のOTOの活動体の多くは「グノーシスのミサ」を定期的に挙行している。殆どの地域でミサへの出席には、OTOへの正式加盟は必要とされないが、参加者は皆、ホルス神の顕現である聖餐を受けるように要求される。「グノーシスのミサ」はOTOの中核的儀式であり、その内にOTOの最奥義である第九位階の秘儀が描かれているという。そして、そこには「大作業 Great Work」の大いなる叡智が脈動している。「グノーシスのミサ」を紐解く鍵は、クロウリーが「愛の完全な数学的表現」と呼んだ「テクトラグラマトンの術式」である。処女として入場した女司祭は、やがて祭壇に於いて、大いなる母となる。司祭の役割は、処女との婚礼により、娘を母の玉座へと上昇させることである。東に設置されたヴェイルは「深淵」の象徴であり、やがて司祭も象徴的に深淵を超え、不可視の存在となる。「グノーシスのミサ」に於ける「テクトラグラマトン」の対応は、この他にも多岐に渡り、それこそ長年の研究が必要とされる。

「グノーシスのミサ」は、我々の啓明と参入の公的礼拝であり、OTOの神学による解放の祝祭である。また新たな神学による人間の主体性の発現は、クロウリーが「復活の契約」と呼んだ人の運命の開示へと参加者を導く。そして、聖化された秘蹟を摂取する時、正に「聖人達との霊的交流」が実現するのである。これは、明確な魔術の術式を根底に置く高度な魔術儀式であり、その象徴体系は多くのOTOの魔術師達によって研究が続けられている。

「グノーシスのミサ」の神殿は、正しくカバラの「生命の樹」そのものである。クロウリーの意図は、司祭と女司祭が織りなす恍惚の祝祭を、確たる魔術のフォーミュラで定式化することにより、神殿にはカバラの叡智が散りばめられている。「グノーシスのミサ」に於ける神学は、Thelema の法と原理そのものであり、意志の下での愛、そして結合という名の秘儀の下、「創造」の極致が語られている。

“これが世界を再生させるであろう。わが姉妹なるその小さき世界、わが心臓、そしてわが舌、わが接吻を送りし者を。また、おお書記にして預言者、汝王子らに仕える者とあれども、それは汝を乾きから癒す事も、汝を罪より放免する事もないであろう。しかし恍惚は汝のもの、そして地上の喜びなり。常にわが方へ！わが方へ！”

9.OTO Japan

OTO は、日本において途切れることなく四半世紀もの間、活動継続している稀有な魔術団体として位置付けられる。団としての活動は四半世紀以上、一度も休止されることなく綿々と続いてきた。日本における OTO の活動は 1988 年に端を発している。そのきっかけとなった団との最初の接点は、当時 I.:O.:S.:によって発行された機関誌『ホルスの槍-O.T.O.特集』にある。I.:O.:S.:の主催者であった秋端氏が 1987 年 6 月 17 日にカリフォルニア州バークレーにあった旧 OTO グランド・ロッジに送付した一枚の手紙と『ホルスの槍-O.T.O.特集』が日本と OTO の最初の接点である。これに応ずる形でカリフォルニアの兄弟 L.E.A. が、1988 年 4 月に日本を訪れることになる。

日本で最初に設立された OTO の活動拠点は、東京のソティス・キャンプであり、1989 年 2 月に結成されている。二番目の活動拠点は、現在も活動を続けるニhil・キャンプであり、91 年に活動を開始している。この後のニhil・ロッジの初代マスター、兄弟 S. が初代の FSR である。1995-96 年になると、更に三つのキャンプが活動を開始する。神奈川の INRI キャンプ、東京の Caduceus キャンプ、そして大阪の Sky Goddess Nu キャンプである。このようにこの当時、1990 年代後半には五つの活動拠点が並行活動していたが、関東エリアでは統廃合によりニhil・オアシス(当時)に吸収されていくことになる。後に川崎にマスガタ・キャンプが設立されたものの(2004 年)、5 年弱の活動でその幕を閉じている。厳密にいうと更に二つのキャンプがかつて存在していたが、それらの拠点は語るべき足跡を何も残していない。

現在、日本には下記 3 つの活動拠点が存在している。

- *Nihil Lodge* 東京 <http://www.otojapan.org/nihil/>
- *Sky Goddess Nu Camp* 大阪 <http://www.otojapan.org/sgn/>
- *Deus Solis Ra Camp* 千葉 <http://www.otojapan.org/dsr/>



OTO Japan は国籍や民族に一切関係なく、Thelema の法を受け入れた自由な男女によって構成され、活動している魔術団体である。各々の活動拠点は、国際総本部から正式な認可を受けたマスターによって指導され、関東圏、関西圏のそれぞれで定期的な活動を展開している。各拠点が開催する勉強会は、多くの場合、団の外部にも開放されており、団と外部との貴重な交流の場になっている。

OTO への参入に関しては、一定の規則があり、物理的なイニシエーションによってのみ正式なメンバーとして迎えらる。志願者はまず、OTO Japan のホームページに記載されている最寄りの活動拠点到コンタクトすることから始めるだろう。この最初の接点で問題がなければ、次に各拠点のオフィサーらによる面接に進む。この時、曖昧さが残り、またその動機に疑義が生じ、尚且つ OTO への参入に適さないと判断された場合、後日その旨が志願者に伝えられる。

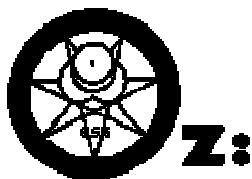
面接に於いて、志願者が認められると次に入会申込書に必要事項を記載し、OTO の活動拠点到提出することになる。注意すべきは、この時、第一位階以上のスポンサー2名の

署名が必要であることだ。通常は、面接を行ったキャンプ、オアシス、ロッジのオフィサーがスポンサーとなる場合が多い。そして志願者は、すべからく参入の為の神殿へと誘われ、最初の位階であるミネルヴァルの儀式を受けることになる。ケース・バス・ケースではあるものの最初のコンタクトから、ミネルヴァルの儀式を受けるまでの期間は、通常数ヶ月から半年程度である。とはいえ、半年以上、参入のチャンスが与えられない場合もままある。それらは全てキャンプ、オアシス、ロッジのマスターによって判断されるだろう。

ミネルヴァルの位階は、正式なOTOのメンバーであるというよりも、むしろゲストと見做されている。団の正式な構成員として、他の志願者のスポンサーになれる正式団員は、第一位階以上の参入者に限られている。OTOの門戸は開放されている。ただし、そこに明確な意志がなければ、簡単に退けられてしまうことになるだろう。あなたの意志が団に歓迎されんことを！

愛は法なり、意志の下で愛こそが

Hieros Phoenix



第 77 の書

“これが強者の法なり。

これが我らの法

そして世界の喜び”

法の書 第2章 21 節

“汝の意志することを行え、それが法の全てとなろう”

法の書 第1章 40 節

“汝は自らの意志を行う他には権利を持たぬ。それを行え。
されば何者も拒絶する事はないであろう”

法の書 第1章 42-43 節

“すべての男、すべての女は星である”

法の書 第1章 3 節

人の他に神はなし

一. 人は己自身の法に従い生きる権利を有す

己の意志に従い生き、
己の意志のままに働き、
己の意志のままに遊び、
己の意志のままに休息し、
己が望む時と方法により死ぬ権利を有す

二. 人は己の欲するものを食す権利を有す

己の欲するものを飲み、
己の欲する場所に住み、
己の意志のままに地球上を移動する権利を有す

三. 人は己が意志することを考える権利を有す

己が意志することを話し、
己が意志することを書き、
己が意志することを描き、彫り、刻み、型取り、建て
己が望む装いをする権利有り

四. 人は己の意志するままに愛する権利を有す

“汝の意志のままに、おまえが満たせるだけの意志なる愛を受け入れよ。何時でも、何
処でも、そして誰とでも、汝の意志において”

法の書 第1章 51 節

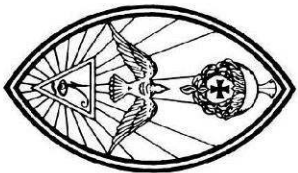
五. 人はこれらの権利を侵害しようとする者を殺める権利を有す

“奴隷達は仕えるべし”

法の書 第2章 58 節

“愛は法なり。意志の下に愛こそが”

法の書 第1章 57 節



Organizational Diagram of Ordo Templi Orientis

